

平成21年度

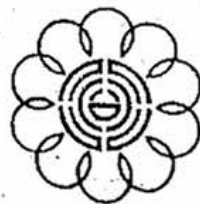
## 第41回 越谷市民文化祭

平成21年11月20日(金)～23日(月)

10:00～19:00(最終日は18:00)

### 郷土研究の部・展示作品紹介

於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ



- ◇周りの10個の輪は、昭和29年11月3日に合併した十町村である二町八ヶ村(「越谷町」の誕生)をあらわす。  
 十町村とは、越ヶ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村をさす。
- ◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を4個集めたもの。つまり、越谷の『越』(「コ4」)を意味する。
- ◇中心部のデザインは越谷の『谷』の文字を図案化したものである。
- ◇昭和30年11月3日には、草加町に合併していた川柳村のうち、伊原、麦塚、上谷が越谷町に入る。
- ◇越谷町は、昭和33年11月3日に市に昇格し、越谷市となる。

### 第41回 市民文化祭

### 郷土研究の部・展示作品リスト

番号	題名	頁	出品者名	住所
1	大沢の鯉鮎屋さんにある一枚の画	1	金子 寛	南越谷一丁目
2	綾瀬川の河岸場跡を訪ねて	3	鈴木 恒雄	足立区花畑三丁目
3	越谷周辺の六阿弥陀めぐりと 新発見のご詠歌	7	加藤 幸一	春日部市大枝
4	越谷市内の消えゆく歌	11	高崎 力	平方
5	越谷市内を流れる元荒川は元・利根川で、 北越谷地区は乱流していた	13	秦野 秀明	大沢
6	越谷と人気投票	18	原田 民自	弥十郎
7	越谷の「焼き米」の方が 草加の前餅より古い	20	宮川 進	千間台西二丁目
8	増林の勝林寺本尊と岩槻城主渋江氏	22	山本 泰秀	増林二丁目

※上記の展示作品や越谷市郷土研究会の入会に関する問い合わせ先は、

NPO法人・越谷市郷土研究会の宮川進(当代会会長・電話及びFAX975-9139)までお願いします。

# 1. 温純屋さんにある一枚の画

金子 寛

大沢橋のたもとにある鰻料理店「温純屋」に、明治の頃、客の一人が描いて残していった一枚の水彩画がある。川を挟んでおそらく天ぷらの「天芳」の二階あたりから、東西に長く建っている「温純屋」の建屋全体を描いたもので、正面に四本の松の木が青空に聳え、木材で組んだ川岸の護岸柵が見事な規則だった格子状を示して画の中央部を構成している。家並みは両側の二階建て（西側の家屋は今でも残存）が平屋の二棟を挟んで四棟並び、表道路（日光街道）に面した二階建ての軒には藍色の下地に白く「山万」の屋号が入った暖簾が下がっている。その隣には米俵らしきものが積み重ねられ、その脇で客人風の二人が立った姿と次の間にも四人の男が見える。画面の左側（西側）後方には銭湯の煙突が二本立っている。川岸では女中らしき女性が洗濯か洗いの仕事をしている。内二人の髪は結い方が独特である。川面には白鳥と思える水鳥が二羽描かれ、描かれた季節が十一月から二月頃かと思わせる。右下に、HあるいはNのイニシャルで、Hisano（ひさの）と読める朱色のローマ字サインが記されている。

このサインをきっかけに、いつ頃描いた画で、誰が描いたのか、同じ作家の画が他にあるのかを調べに入った。

市の図書館の協力で、明治の中頃から、外国人が日光を訪れ、滞在し、彼等を対象に土産用に社寺、仏閣を描く画家（土産絵師）の存在が多かったことが判った。おそらくそのような一人が日光への行

き帰りに越谷に寄り、どのような経緯からか判らないが、温純屋で一枚残していったものと思われる。

一方、日光の「小杉放庵記念日光美術館」に、N、HISANOのサインが入った水彩画があることが判った。一九九八年、同館が催した「甦る日光・社寺を描いた水彩画」展でその画が展示され、館でもN、HISANOなる画家の調査をしているところだった。館の説明で、同じようなサインの入った画を名古屋の画の収集家が所有していることも判っている。これは海外で見つけてきた里帰りの画という。

画に描かれた銭湯の煙突は、位置的に「佐々の湯」のものであることが判ったので、「佐々の湯」のご子孫の方に、いつ頃から銭湯を始めたのかお尋ねした。これも祖父の時代のものであり、描かれた時期が明治の中頃と考えても大きな矛盾はない。

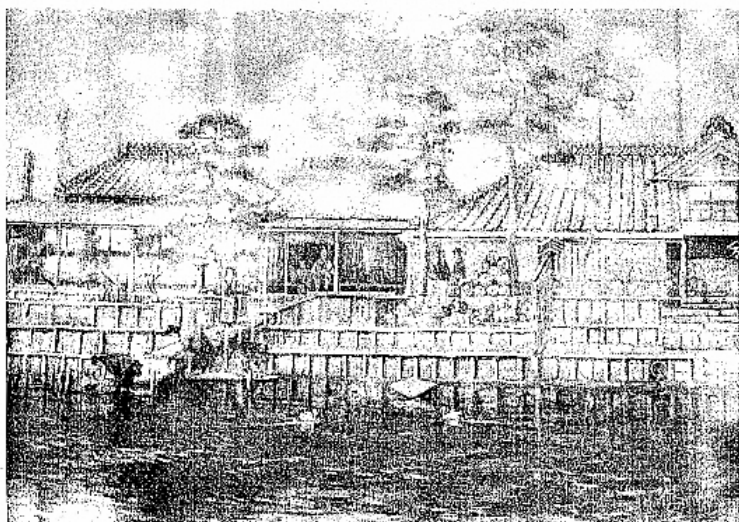
水彩絵の具が日本に入ってきたのは明治初期と言うことであり、明治四十二年頃には国産チューブ入り絵の具が登場している。

先の「甦る日光社寺展」の作品は凡そ今から百年前の日光で描かれた水彩画を集めたもので、その色彩の鮮やかさは見事なものである。

さほどに名を残した画家ではないが、明治の風景が残る姿がこの画から偲ばれ、一度鑑賞に赴くのも一興ではないだろうか。

参考文献 甦る日光・社寺を描いた水彩画（世界遺産へのオマージュ）

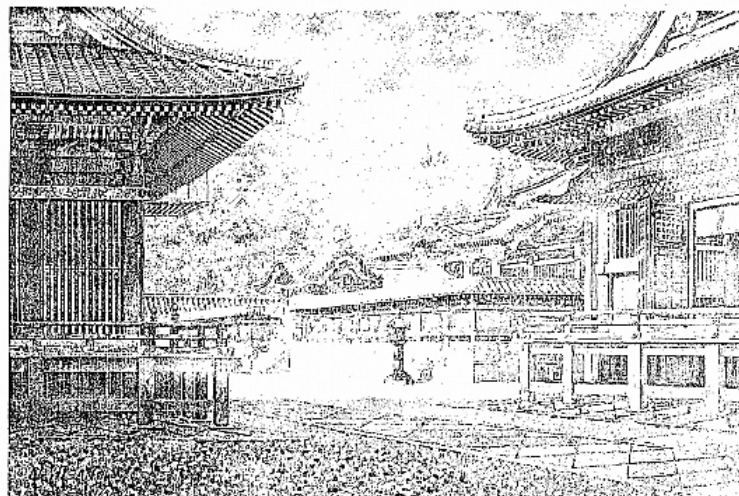
小杉放庵記念日光美術館



大沢の温純屋にあるN. HISANOのサインが入っている水彩画  
(大山泰弘氏所蔵)

「明治中期の温純屋全景」(48×68cm)

N. HISANO.



「甦る日光・社寺を描いた水彩画」展(1998)に出品された  
N. HISANOのサインが入っている水彩画  
(小杉放庵記念日光美術館所蔵)

「東照宮・神楽殿と上社務所」(33.8×51.4cm)

N. HISANO.

## 2. 綾瀬川の河岸場跡を訪ねて

鈴木恒雄

### 【綾瀬川のかつての舟運について】

綾瀬川は、かつての秩父盆地からの旧荒川の本流であり、慶長年間以前は、大型の舟でも運航可能な大河であったと推定される。

江戸時代初期、伊奈氏により綾瀬川上流が締め切られ、水位が下がり、安定した河川になって、舟運や新田開発が可能になった。そして、江戸への年貢米の輸送のため、寛永年間（一六二四頃）に花又（現在の足立区花畑）から小菅への直線ルートが開削され、江戸への直送コースが開かれた。同時に川の堰止め禁止令が出され、これが舟運隆盛の基礎となり、綾瀬川筋の年貢米の給が浅草・蔵前へ直行できた。

明治の鉄道が開通する以前は、大量に物資を輸送するには舟運しかなかった。舟運は日用物資の輸送のみならず、この河川を遡る下肥運搬も新田開発の肥料不足解消のため大きな役割を果たした。

大正二年（一九一三）の舟運の商品リストでは、上り荷で、大豆粕、糠粕、糠油、陶器、塩、人造肥料、他に花又糠瓦などがある。基本的には下肥が中心と思われるが、これは記録に残っていない。下り荷では、圧倒的に多い米、あとは小豆、甘藷、糠、木材、炭、食用油、他に掃浪など（掃浪の用途は漁網の防腐剤、油紙、番傘の紙、染物型紙など多用途に使用）があげられる。大正年間でも鉄道と舟運のコストの比は3対1であり、舟運でも十分に太刀打ちできた。しかも河岸近辺の下肥利

用農民にとっては、舟運はドーアツードアであり効率がよかった。そのため舟運は昭和三十年代まで続いた。なお、草加松原から上流は曳き船となっていた。

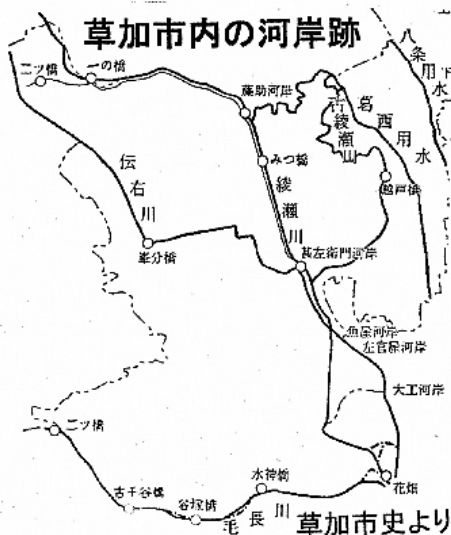
### 【綾瀬川のかつての河岸場について】

妙見河岸から下流にかけて挙げると次のとおりである。妙見河岸には大正時代の河川改修まで用水堰があり、船がそれ以上の遊上は無理であったので、妙見河岸よりさらに上流の河岸は調査の対象から外した。なお、5から9までの河岸は越谷市内にあった。

1. 妙見河岸・膝子河岸
2. 戸井河岸（渡井河岸）
3. 尾ヶ崎河岸（新河岸）
4. 大門（たいもん）河岸（暖なわて）河岸
5. 戸塚河岸（銀蔵河岸）・越巻（こしまき）河岸
6. ニツ橋河岸
7. 一の橋河岸（よしずや河岸）
8. 半七河岸
9. 藤助（とうすけ）河岸（蒲生河岸）
10. 甚左衛門河岸（札場河岸、谷古字「やこご」河岸）
11. 魚屋（うおや）河岸（手代河岸）
12. 一国屋河岸（柳之宮河岸、西袋河岸）
13. 綾瀬川河岸（花又（はなまた）河岸、開屋河岸（大曾根河岸）
14. 榎戸（えのきと）河岸（内匠「たくみ」河岸、浮塚「うきづか」河岸（忠治河岸）

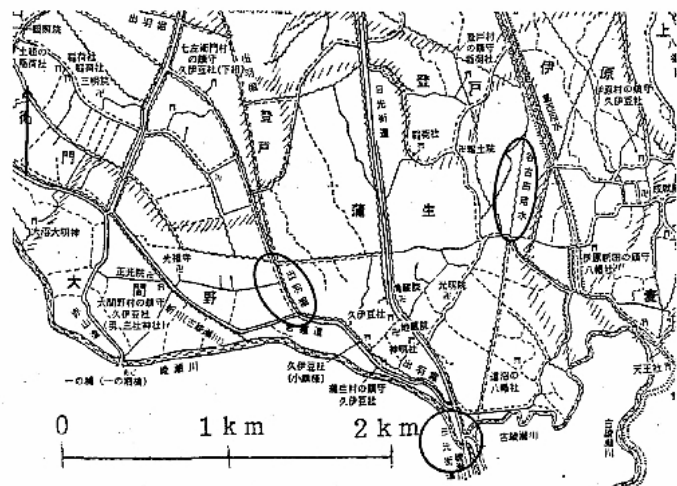


原図は20万分の1地勢図 東京

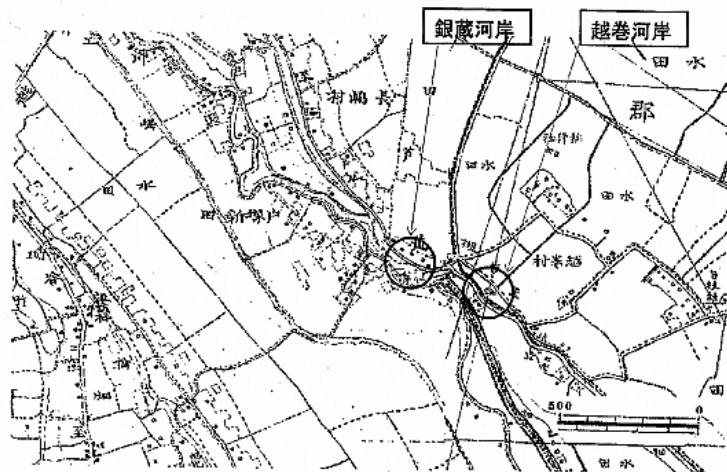


- 1 妙見・膝子
- 2 戸井（渡井）
- 3 尾ヶ崎（新河岸）
- 4 大門（暖）
- 5 戸塚（銀蔵）、越巻
- 6 ニツ橋
- 7 一の橋（よしずや）
- 8 半七
- 9 藤助（蒲生）
- 10 甚左衛門（札場・谷古字）
- 11 魚屋（手代）
- 12 一国屋（柳之宮・西袋）
- 13 綾瀬川（花又）・開屋（大曾根）
- 14 榎戸（内匠）・浮塚（忠治）

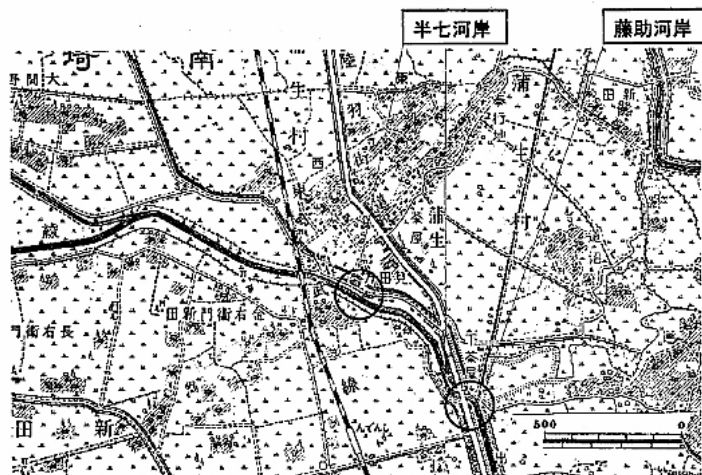
藤助河岸周辺の水路状況 加藤幸一氏の資料による



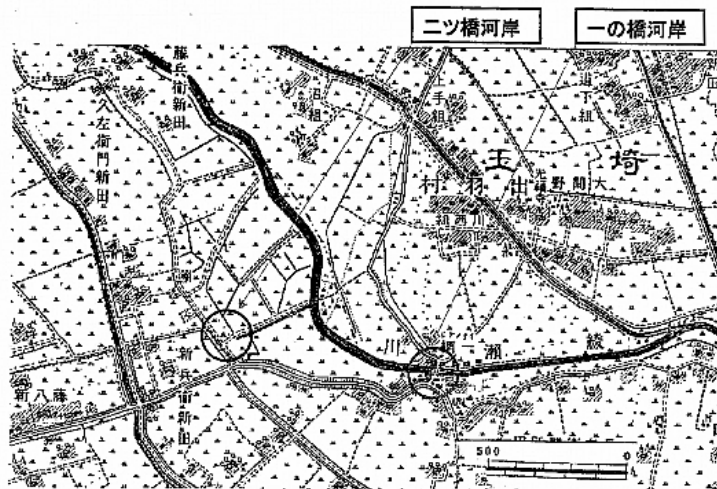
越巻河岸跡と銀蔵河岸跡



藤助河岸跡・半七河岸跡



一の橋(よしずや)河岸とニツ橋河岸跡





3. 越谷周辺の六阿弥陀めぐりと新発見のご詠歌

加藤幸一

江戸時代に江戸の町で盛んに行われていたのが「六阿弥陀めぐり」である。阿弥陀如来像を安置している六ヶ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。明六ツ（午前六時）に自宅を出て、一巡六里といわれる距離を巡拝し、暮六ツ（午後六時）に帰った。

この越谷周辺地域にも、江戸の六阿弥陀めぐりをまねて、天明八年（一七八八）に船渡村の愛道によって、「新六阿弥陀」めぐりが始められたのである。

次にその新六阿弥陀の六ヶ所の寺院の巡拝には欠かせないご詠歌を紹介する。

新六阿弥陀の二番である林泉寺から平成十八年五月に発見された和讃集に書かれていたものである。これまで一部不明な寺院があったが、これによって新六阿弥陀寺院がどことどこであるかが確定することができたのである。

第一番 天岳寺

六阿弥陀

いづくの間をて

越ヶ谷の

天岳寺へ

参る人にそ

参る人にそ

第二番 林泉寺

指はやし

参るころろハ

林泉寺

二世安楽ハ

弥陀の誓願

第三番 源光寺

めぐりきて

こゝに赤岩

源光寺

弥陀の手引で

渡る中川

第一番 天岳寺

六阿弥陀

いづくの間をて

越ヶ谷の

天岳寺へ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

参る人にそ

第二番 林泉寺

指はやし

参るころろハ

林泉寺

二世安楽ハ

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

弥陀の誓願

# 江戸時代のお彼岸の行事

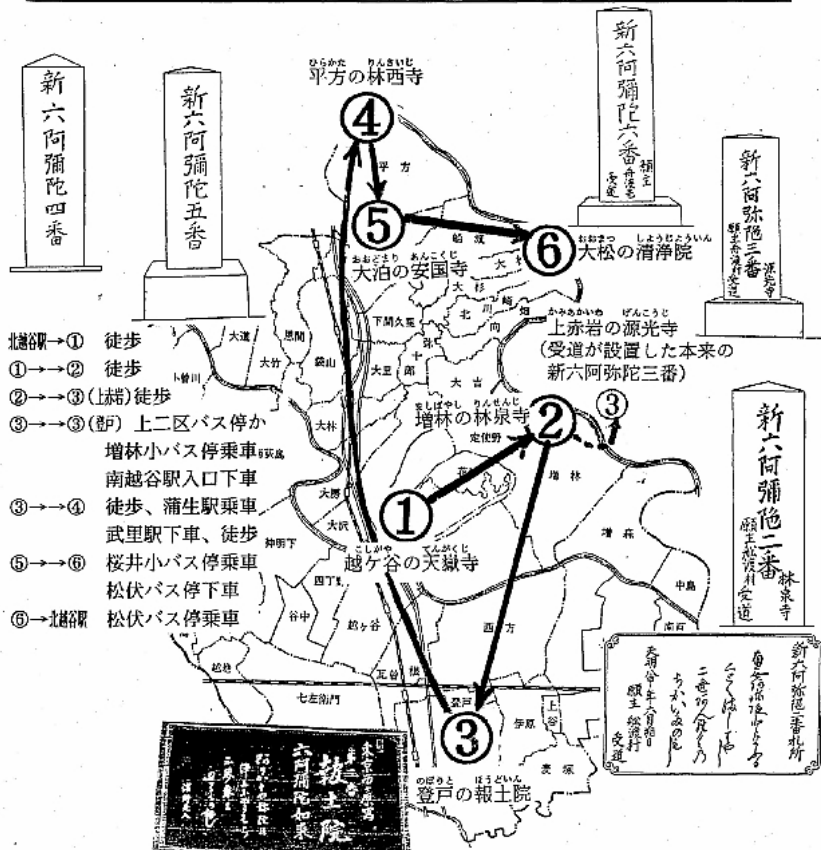
・江戸時代の越谷地域では、春と秋のお彼岸のころに一日かけて「六阿弥陀めぐり」が盛んに行われていたと思われます。

・現代人の皆様、正月の「七福神めぐり」もよいですが、「六阿弥陀めぐり」をやってみませんか。

そして、「越谷の六阿弥陀」を郷土の誇りにし、多くの人に知ってもらいましょう。

・昔ながらの徒歩では一日かかります（朝から夕方まで）。現代人の便利な乗り物、自転車ですと、朝出て昼、又は、昼出て夕で十分に済みます。

順路は下記の他に 4→5→6→3(上端)→2→1→3(野)、或いはその逆も可です。



# ひと 彩々

朝日新聞 2006年(平成18年)6月1日 木曜日

## 江戸期の行事定説覆す

越谷市郷土研究会 加藤幸一さん



阿彌陀如來をめぐり、力所の寺を、願主をかねて参拝する「六阿弥陀めぐり」江戸時代は越谷周辺でも盛んに行われていた行事について、越谷市郷土研究会の加藤幸一さん(56)は、市内の寺にめぐり、

これら寺をめぐり、力所の寺を、願主をかねて参拝する「六阿弥陀めぐり」江戸時代は越谷周辺でも盛んに行われていた行事について、越谷市郷土研究会の加藤幸一さん(56)は、市内の寺にめぐり、

左の寺がきつかけだった。寺の行燈に「佳慶」と通じた加藤さん、が記された、古文書を見れば、越谷の六阿弥陀めぐりの歴史が明らかになった。加藤さんが記された六阿弥陀めぐり、江戸時代の越谷周辺でも盛んに行われていた行事について、越谷市郷土研究会の加藤幸一さん(56)は、市内の寺にめぐり、

「本誌」は市内に数箇所あると見られる行灯の調査だ。六阿弥陀めぐりの調査を進め、寺の行燈に「佳慶」と記されたものが見つかった。これによって、江戸時代の越谷周辺でも盛んに行われていた行事について、越谷市郷土研究会の加藤幸一さん(56)は、市内の寺にめぐり、

「本誌」は市内に数箇所あると見られる行灯の調査だ。六阿弥陀めぐりの調査を進め、寺の行燈に「佳慶」と記されたものが見つかった。これによって、江戸時代の越谷周辺でも盛んに行われていた行事について、越谷市郷土研究会の加藤幸一さん(56)は、市内の寺にめぐり、

新六阿弥陀二番札所  
増林の林泉寺  
ましげん 林泉寺  
願主 船渡村  
受道

新六阿弥陀二番札所  
(唱うる)  
南無阿弥陀となふる  
(功德) (増林)  
くどくまはしはやし  
(安楽)  
二世あんらくの  
(誓い)  
ちかいたのもし  
天明八申年六月朔日  
願主 船渡村  
受道



東京西ヶ原原  
第三番  
報土院  
六阿弥陀如來  
ありかたや、弥陀の  
浄土に、西かはら  
二ツ分衆生  
のこるものなし  
渡野老人

#### 4. 越谷市内の消えゆく歌

高崎 力

越谷市は、かつては農家が大部分を占めていて、田植え歌、麦打ち歌、祝儀歌、祭り歌、そして童(わらべ)歌から各種の念仏など数多くの歌が歌い継がれていたが、急速な都市化と共に忘れ去られてきた。

次の歌は、下間久里の田植え歌である。

「ヤレ 十七ヨ 今年初めて 田植えた しかも しかも

この田はヨ よくできたヨ

ア ウエテシヤレ ウエテシヤレ

ヤレ 丈がナ 丈が一丈で 穂が五尺 こいて こなして

実が五石ヨ

ア ウエテシヤレ ウエテシヤレ

ヤレ こいてナ こいてこなして 実が五石 樹は

樹はいらなで 箕ではかるヨ

ア ウエテシヤレ ウエテシヤレ

「ウエテシヤレ」は「植えてさがれ」の訛ったものであるが、農民の豊作を願う気持ちに即興的に表現されている代表的田植え歌である。

次に、婚礼に招待された時の大相模の祝儀歌から一部の歌詞をあげてみよう。

「これ様へ お招(ま)ばれ申して かくのお座敷あげられて 格

式は存じませぬが 手落ちがあつたらごめんなき

今日 お祝い おめでたい

これ様の お嫁ご様の お座る姿を見もうせば 髪かたち

ご器量のよいこと

おふた親様はお手柄よ 今日 お祝い おめでたい

これ様の お玄関先に 梅の大木 植えおいて

西の枝にワグイス止まらせ

この家繁昌と舞い遊ぶ 今日 お祝い おめでたい

これ様の お嫁ご様の 上に召したる お小袖は

田舎染めか 京染めか

今日お座敷照り光る 今日 お祝い おめでたい

これ様の お嫁ご様の 上に召したる お小袖は

裾模様は 松竹梅

五ツの数が 鶴と亀 今日 お祝い おめでたい

今日のお盃は おこしもとへ納まる きにせんの山を飾る

山に俵を積み重ね

雄蝶(めちよう)雄蝶(おちよう)の小口(こぐち)を揃えて

千秋楽と納むる

歌とは性格を異にするが、お年寄たちによつて歌われる念仏も数多くある。新築に招かれた時の家見(いえみ)念仏(地元で「エミネンブツ」と呼ぶ)、法事に招かれた時の法事念仏、そして通夜念仏、死仏(しばらい)念仏、枕念仏から新盆(地元では「ミボン」と呼ぶ)のお棚念仏、更に旧暦三月十日の様名お姫念仏といろいろある。

※以上は、昭和49年4月15日「広報(しがや)」の

『市史編さんだより【第134号】(高崎力著)より抜粋

参考までに、次は、平成七年に大松地区の石仏調査の時に手に入れた地蔵念仏の文言を紹介する(加藤幸一)。

きみよちようらい おじぞさま さんがいみすじに おたちある  
なながしよがんで おたちある なにもしよがんはないけれど  
あまりこの世が じゃけんさに ねんぶつすすめに おたちある  
なむあみだぶつ なむあみだ

きみよちようらい しもつけの ゆわふねさんと もうせしが

むぶつせかいの だいどうじ まいざか うらざか みせんざか

のぼりておがめば じぞうそん 水もないのに ふねうかぶ

ふねはしろがね るはこがね はしらはきんぎん まきはしら

あやにしきの ほをあげて きんらんどんすの まくをはり

あまたのぼさつが みなおのり せいしぼさつが かじのやく

じぞうぼさつが さおさして にしい にしいと こぎゆけは

にしはさいぼう みだによらい にくらくじょうどのいちのものん

ぜにでも金でも あからない ねんぶつろくじで さらとあく

あけておくのま はいすれば 一にこころう 二におはな

三にしきびの おりいだを そないてねんぶつ となればは

十三ぶつのみかげさす あーありがたや じぞうそん

なむあみだぶつ なむあみだ

1行目 きみよちようらい↓婦命頂礼

おじぞさま↓お地蔵様

さんがいみすじに↓三界三筋に

2行目 しよがん↓諸願

5行目 しもつけの ゆわふねさん↓下野の岩船山

8行目 まきはしら↓真木柱

11行目 にしい にしいと↓西(西へ)と

12行目 さいぼう↓西方

13行目 ねんぶつろくじで↓念仏六字で

14行目 おくのま↓奥の間

15行目 おりいだを↓折り枝を

16行目 みかげさす↓御影差す

※大松八二(永野工務店)の明治四十一年八月生まれの

永野ふじさん(岡安家本家からの嫁)のメモ書きを、

原文のまま掲載した。







写真1

国土地理院 空中写真 (1947・10・23撮影)  
129番を加工して使用



写真2

国土地理院 空中写真 (1947・10・23撮影)  
129番を加工して使用

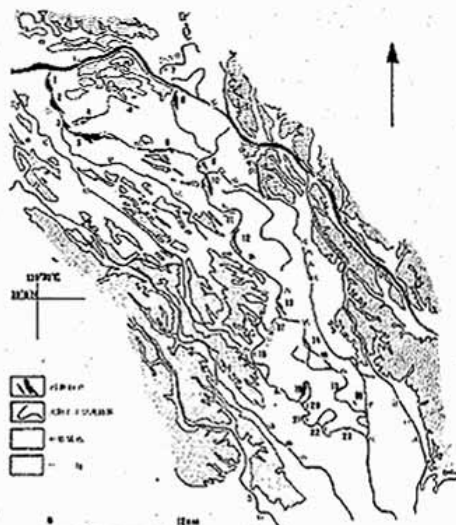


図1 河畔砂丘の分布図

平社定夫・佐藤和平 1993 『中川水系 I 総論・II 自然』  
第一章第一節四 埼玉県 84頁を使用

- (1) 新郷 (2) 岩瀬 (3) 砂山 (4) 須影 (5) 吉多見 (6) 南郷崎 (7) 飯積 (8) 原道
- (9) 高柳 (10) 西大輪 (11) 青毛 (12) 高野 (13) 小淵 (14) 藤家 (15) 松伏 (16) 上赤岩
- (17) 浜川戸 (18) 長宮 (19) 袋山 (20) 大林 (21) 北越谷 (22) 東越谷 (23) 大相模

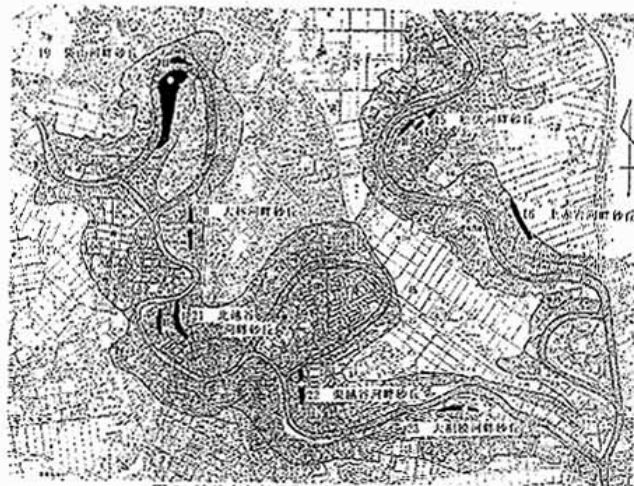
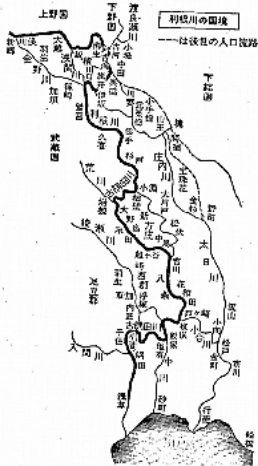
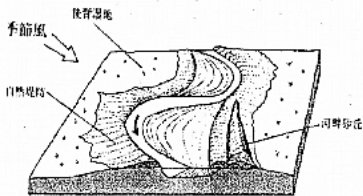


図2 越谷市と松伏町の河畔砂丘と周辺の地形

平社定夫・佐藤和平 1993 『中川水系 I 総論・II 自然』  
第一章第一節四 埼玉県 94頁を使用



参考資料① 利根川の国境  
本間清利 1978 『利根川』  
埼玉新聞社 52頁を使用



参考資料② 阿保砂丘のでき方(模式図)  
堀口萬吉編 2000 『埼玉の自然をたずねて』  
築地書館 41頁を使用

註

(1) 代表的なものとして

本間清利 一九七八 『利根川』 埼玉新聞社

※ 『利根川』 初出は 『住田河』 『頼繁三代格』 承和二年(八三五)六月二九日

(2) 平辻定夫・佐藤和平 一九九三

『中川水系 I 総論・II 自然』 第一章第一節四 埼玉県 八二―一八頁

(3) 前掲書註(2) 一七頁

(4) 前掲書註(2) 八二頁

(5) 前掲書註(2) 八五頁

(6) 早田勉 一九八八 『関東・甲信越の火山 I』 築地書館 七四―一九二頁・

高橋正樹 一九八八 『関東・甲信越の火山 II』 築地書館 九三―一八八頁

(7) 前掲書註(2) 九七―一七頁

(8) 国土交通省 国土地理院 空中写真(一九四七・一〇・三撮影) 二九番

(9) 前掲書註(2) 九三頁・北越谷河畔砂丘

大林河畔砂丘の(1) 南側の蛇行部、越谷市北越谷に二列の河畔砂丘が発達する、いずれもゆるく湾曲した平面形態を示し、北から南へのびる。

I は浄光寺をのせ長さ五八〇m、幅七五mであり、II は北越谷小学校の東の住宅地をのせ長さ三五〇m、幅五〇mである。低地との比高は、二m前後である。

(10) 高崎力 二〇〇七 『大沢のセツ池』 『古志黄谷』 一四号 八三・八四頁

(11) 『光井家文書』(越谷市大沢)

(12) 加藤幸一 一九八八 『元荒川(南越谷)出土の板碑群』(未公刊)

(13) 江澤昭融 一八四一 『大澤町古馬宮』(原本三四頁)

(14) 『新編武蔵風土記稿』巻之二百二 埼玉郡之五 越ヶ谷領

(15) 前掲書註(13) (原本七二頁)

(16) 前掲書註(13) (原本五一頁)

(17) 西角井正慶 一九六六 『祭祀園の問題』 『古代祭祀と文学』 中央公論社

## 6. 越谷と人気投票

原田民自

越谷市では、昭和五十二年(一九七七)九月、第三回交通安全市民まつりが行われた際、第一回交通安全ミスコンテストが実施された。ミス一人・準ミス五人が審査員により選ばれ、笑顔をふりまきながらオープンカーに乗って市民に交通安全を呼びかけた。昨年の市民まつりでもミス越谷コンテストがあり、審査員による選考で、ミス越谷・準ミス越谷が選ばれた。越谷市ではこのようなコンテスト・人気投票は三十年以上の歴史がある。

明治三十五年(一九〇二)七月より埼玉新報で一か月半にわたり、埼玉県下の割烹店(料理屋)の人気投票を行った。これは埼玉新報の紙面に掲載された投票用紙を切取って投票するもので、上位十位までが大賞見が贈られるというものだった。投票締め切りにあたる八月三十一日の集計発表によると、越谷周辺での結果は次の通りである。

- 五位 一万九千八百七〇票 越ヶ谷町 紀伊園屋
- 一六位 九千七百五〇票 越ヶ谷町 嶋田屋
- 二五位 二千〇四〇六票 越ヶ谷町 天芳楼
- 四一位 二九一票 大沢町 うどん屋

埼玉新報では明治三十九年(一九〇六)八月より九月にかけて「芸妓十美人投票」を行った。芸妓とは、舞踊や音曲・鳴物で宴席に興を添え、客をもてなす女性のことで、越谷周辺ではこのような女性を置く屋敷が江戸時代から大沢地区にあった。

芸妓十美人の投票は次の要領で紙上にて行われた。一、被選者は県下に営業中の芸妓たる事、二、投票用紙は本紙に刷出せる物に限る、一、投票用紙には一枚一名宛認(した)たむべし、一、用紙には住所番号

名簿を記入の事。この芸妓十美人投票が多くの読者の共感を呼んだのか、個人と商店などから多くの副賞目録が連日にわたり紙面を飾った。埼玉新報では連日にわたり途中経過を紙面を割いて大きく発表し、それぞれの地域では他の地域に負けんとはばかりに競って投票に参加したので、毎日のように順位が入れ替わった。そしていよいよ結果発表となるが、後日「芸妓十美人」の写真が紙上で掲載されたが、当日の新聞は現存していない。

- 第一位 五万九千八百五三票 本庄 千年家 玉寿
  - 第二位 五万三千七百八〇票 浦和 若松屋 若吉
  - 第三位 五万二千〇〇〇票 大宮 愛生屋 千代子平
  - 第八位 一万八千〇二十八票 大沢 寿美屋 萬藏
  - 第十位 一万〇四百七十一票 大沢 三樹屋 駒次
- 千六百三十二票 大沢 出羽家 小霜

埼玉県内で行われた芸妓十美人投票では大沢地区で「萬藏」と「駒次」の二名の芸妓が十美人に選ばれた。こうした人気投票は当時、新聞購読者の拡大を図る一つの方法であった。

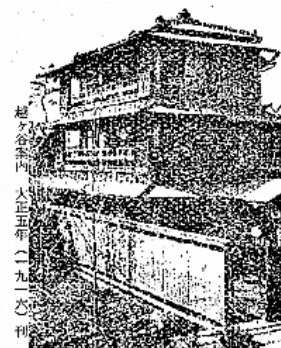
明治三十五年(一九〇二)五月から六月にかけて行われた、埼玉県下町村名望家の投票によると、締切り一日前の結果で、南埼玉郡大袋村長の栗原永喜が一万五八八九票で第三位、出羽村長の井出庸造が二千三百票、川柳村長の豊田貞治が二千四百票、増林村長の榎本英蔵が二千九百票、荻島村長の鈴木空吉が三千二百票、新方村長の長野保寿老が三千七百票、越ヶ谷町長の佐川重作が五千七百票となった。

その他、埼玉県醤油醸造人気投票では、越ヶ谷町の松本利兵衛醸造の「亀甲松」が六位、中川源吉醸造の「富士宗」が二十三位となった。

## 越谷と人気投票(2)



大沢橋の艦船屋 明治35年(1902)に埼玉新報社主催の埼玉県下の割烹店(料理屋)の人気投票で41位に入った



加賀屋 大沢橋際に昭和46年ごろまであった料亭・三層楼



天芳楼は人気投票で25位 てんぶらと蒲焼が有名だった



明治・大正美人芸妓絵葉書 芸妓をモデルとした美人絵葉書が数多く発行され、日露戦争では戦地の兵士たちを喜ばせた。



第1回 越谷市交通安全ミスコンテストが昭和52年(1977)に行われ、ミス1人と準ミス5人が選ばれた。写真は6月7日付 朝日新聞

大沢・芸妓屋  
分三樹・小せん

越ヶ谷案内 大正5年(1916)刊



大沢に大正5年(1916)、6軒の芸妓屋と8名の芸妓がいた

## 7. 越谷の「焼き米」の方が草加の煎餅より古い

宮川 進

お隣の市「草加」の煎餅は押しも押されぬ「全国ブランド」。東京駅にだって「草加煎餅」が売られています。越谷でも「草加煎餅」が作られています。正直なところ、その繁栄が口惜しくて、とりあえず越谷と草加の煎餅、どちらが古いかを調べてみました。

草加市史調査報告書第5集「草加せんべい―味と歴史―」によりますと、草加市内に残る煎餅の最も古い資料は、草加市青柳の藤波家に所蔵されている寛政八年(一七九〇)の「万祝儀覚帳」に記載されたものであるといえます。

これは藤波家に同年正月にお年玉として受け取った品々が記録されたもので、塩麴やあま酒などにまじって「せんべい」があります。

越谷の「煎餅」についての一番古い記録は、「結城使行」という元禄十六年(一七〇三)に茨城県結城に築城のため、江戸から出かけた水野家の家老・水野織部長福の紀行文です。そこには次のように書かれています。(越谷市史1 通史 編上)

梅田・嶋根・竹ノ塚と過ぎ、草加に入ると昼となったので、町はずれの茶店で昼休みをとる。「花さかん そうかとぞきく 鳥の声」。草加を出ると川があるので、

何川であると問うと「大河」であるという。また一人は「あやし川」であるといひ、別の一人は「あやせ川」とも答えた。「驚いかに 水の隙を あやし川」。この川を越えんと、道は右(出羽堀)も左(綾瀬川)も、流れ悠々とした川には生まれ、興味のある所である。ただ蒲川(出羽堀)の上に家を構えている家の様子があぶなくみえる。当所の名物だといって道端で焼米を売っていた。此所は加茂村と聞いたが、加茂ではなく蒲生であるという者もある。また加茂と蒲生は一村の中の地名であるともいふ。いづれが本当だろうか。「道ぞ永き日にやき米を 加茂蒲生」。

ここでいう「焼米」とはどういうものでしょうか。焼米という、戦国時代に薙城する武士が即席でたべる「米を火で炒った」ようなものではないかと思っていました。

日本古代食事典には、このようにあります。(略)

焼米(やきこめ)「やきこめ」ともいう。(略)

江戸時代の『本朝食鑑』に「焼米」の作り方が詳しく記されているので、紹介してみよう。

当今作られている焼米というのは、青稲の籾がらを除き、よく炒って春(こ)いて扁(ひらた)くした米をいい、味は佳い。また、新米の籾がらを取り去り蒸してから春(こ)いたもので、その形は扁ではないが、これも焼米である。ただし、青い稲籾の籾がらを取り除いたのは、よ

く妙つてから春(〇)いて扇米にすると、味は甚だよい。広辞苑は「春(〇)は「搗く」と同じで「杵や棒の先で打つておしつぶす」として、用例に「餅を春(〇)く」をあげています。ですから、焼米はいまの煎餅なのです。記録に残るのは越谷が一七〇三年、草加が一七九六年。しかも、越谷の方の「結城使行」は「名物として売っていた」と明確に書き、草加は、貰い物の記録であって、煎餅Ⅱ商品であったかも知れませんが、はつきりしません。

これで、古きことは決着がついたと思いますが、これほど、「草加煎餅」が有名になったのは、やはり、草加の人たちの努力があったからのことです。それには敬意を払わねばなりません。

「焼き米」の最初は醤油が塗られていたわけではなくて、きつと原形は、いわゆる「塩せんべい」だったと思われれます。越谷は「煎餅」ではとても太刀打ちできませんから、「越谷焼き米」というブランドで売り出してはどうでしょうか。「越谷焼き米」は白焼きで、味は「米の味」だけで勝負する。そういう味のユニークさとネーミングで、これは将来、「草加煎餅」を駆逐し、草加で「越谷焼き米」がつくられるのではないかとも思う次第です。

なお、前出の「草加せんべい」の報告書を読んでいて、当会の会友・本間清利さんも、「結城使行」を引いて、越谷の方が古いと、昭和六十三年十月十四日の毎日新聞「タテヨ

「埼玉」でお話されているの気がつきました。二十年以上前のことですが、その後、このことが一般に定着したようでもありますので、焼米とは何かという解釈を加えて、あえて書かせていただきました。

参考書

- 草加市史調査報告書第5集 草加せんべい味と歴史―草加市史編さん委員会編 草加市刊 H4. 3
- 日本古代食事典 永山久夫著 東洋書林刊 00. 5
- 越谷市史1 通史上 越谷市刊 S 50. 3
- 広辞苑 新村出編 岩波書店刊 98. 11第5版

左記の資料は、茨城県立歴史館所蔵「結城使行」結城水野家家中・吉田家文書から一部分を抜粋しました。

### 結城使行 全

くつて焼餅(〇)いて扇米にすると、味は甚だよい。広辞苑は「春(〇)は「搗く」と同じで「杵や棒の先で打つておしつぶす」として、用例に「餅を春(〇)く」をあげています。ですから、焼米はいまの煎餅なのです。記録に残るのは越谷が一七〇三年、草加が一七九六年。しかも、越谷の方の「結城使行」は「名物として売っていた」と明確に書き、草加は、貰い物の記録であって、煎餅Ⅱ商品であったかも知れませんが、はつきりしません。

該当部分の読み下し文

「爰(〇)の名物として常にやまきをひさぐことにていまも門々に多し」

## 8. 増林の勝林寺本尊と岩槻城主渋江氏

山本泰秀

東武伊勢崎線越谷駅からおおよそ四キロほどの田園地帯の先に、増林の閑静な住宅地の中にたえず勝林寺がある。本堂には、岩付現、岩槻(渋江氏)の守護仏と伝えられる木製の十一面観音坐像が祀られている。勝林寺の本尊で、像の座高が四寸六分ほどの可憐な小品である。その御姿は、頭上に弥陀の化仏および変化面を頂き、右手は五指を伸べて膝上に置き、左手に水瓶を持つている。

勝林寺の発祥は、万寿二年(一〇二五)三月十日、源勝という僧が、岩槻にある天長元年(八二四)開山の慈恩寺(天台宗)の末寺として、この地に自耕院を開山したことに始まる。この時に祀ったとされる観音菩薩像は、恵心僧都の一刀三札の製作とされることから、平安時代に遡るとされる。

その後、寺は、衆人によつて度重なり修復されてきた。しかし、寺が無住になることもあつて荒廃してしまつた。その寺を渋江氏の系譜を受け継ぐ懸堂園契(もくどうぎんかい)が新たに修復し、曹洞宗に改宗し、寺号を勝林寺と改名した。天文元年(一五三二)八月のことである。

中興山懸堂園契の世代に「勝林二世」の天松玄固が太田氏の岩付城に赴き、渋江氏代々の守護仏十一面観音の仏像を譲り受けた。天文元年九月二十四日のことである。これ以降、十一面観音像(写真1)は勝林寺の本尊として、今に至つている。

なお、懸堂和尚が亡くなられたのは天文七年四月十六日である。元來、勝林寺住職には、仏像はあくまでも信仰の対象として崇める慣習のみで、仏教美術としてとらえることはなかった。本尊十一面観音は、普段は御厨子にしまわれ、扉が開められ、秘仏として大切に安置されている。御開帳は十二年に一度の午の年である。

〈写真1〉勝林寺本尊十一面観音坐像



〔品〕質 檜材寄木造  
玉目・漆箔  
及び彩色  
〔像高〕一七・一  
センチメートル

ところで渋江氏はどのように活躍してきたのであろうか。次に渋江氏について触れる。

古代の武士団の成立過程に武蔵七党がある。埼玉県内で最も大きな勢力を持っていた武士団には、横山・猪俣・野与・村山・児玉・丹・苗があった。このうちの一つ野与党は、北埼玉及び南埼玉郡を中心に北足立郡、比企郡の分布領域を抑えていた。

鎌倉時代、建久元年(一一九〇)、源頼朝が上洛の折、大蔵経連(渋江経連)は、隨兵として参加して、同四年に地頭となり、以後、代々



# NPO法人・越谷市郷土研究会とは

- ◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。
- ◎当会は、昭和40年(1965)3月に発足し、平成16年にNPO法人になりました。現在は会員数が350名を超える程の大所帯です。ほぼ毎月行われる史跡めぐりは396回を数えるまでになりました。
- ◎当会の最近の主なイベントをあげますと次のとおりです。

- 平成20年9月24日(水)～28日(日) 越谷市立図書館「越谷の歴史あれこれ展」  
 9月27日(土)「素敵旅!『織部』桐生」  
 10月2日(木)～13日(月)「越谷歴史展」(レイクタウン・イオンホール)  
 10月19日(日) 越谷市民まつり「なつかし・五十年前!くらしと遊び」  
 10月22日(水) 大宮の「鉄道博物館」と「県立歴史と民俗の博物館」  
 11月14日(金) 大間野の保存民家、旧中村家での恒例の開館記念イベント  
 11月18日(火) バス史跡巡り「総持寺の精進料理と中華街」  
 12月12日(金) バス史跡巡り「つむぎと蔵と歴史のまち、結城」  
 平成21年1月3日(土)「江戸最古を誇る谷中七福神めぐり」  
 1月25日(日) 講演会「旧・越谷宿の良さを発見しよう」  
 3月1日(日)「案外知らなかった越谷を歩く・越谷から北越谷へ」  
 3月21日(土) 大間野の保存民家・中村家イベント「お手玉作り」  
 3月25日(水) バス史跡巡り「里見八犬伝のふるさと内房」  
 4月15日(土)「花と緑の安行、越谷へつながる伊奈氏の赤山陣屋」  
 5月20日(水) バス史跡巡り「新緑の榛名山の麓、榛名神社・伊香保・水沢」  
 6月28日(日) 講演会「日光社参り身分制」  
 7月24日(金)「大沢のうどんやの韻と北川崎の虫追い」  
 7月26日(日) 講演会「県内の近現代の建物からまちづくりを考える」  
 8月22日(土) 大間野の保存民家・中村家イベント「ロケット作り」  
 8月27日(木)「リニューアルした東武博物館と足立区立郷土博物館」  
 9月11日(金) バス史跡巡り「横浜の開港150年目のお祝い」  
 10月3日(土) バス史跡巡り「甲府の三ノ宮卯之助の石方・県立博物館」  
 11月11日(水) バス史跡巡り「つくばみらい・牛久・土浦」

◎会報「古志賀谷」の隔年の発行(B5版、110～150頁程度)及び無料配布(会員)  
 ※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付・文化財パトロールの活動なども行っております。また、学校や自治会、各団体などへの出前授業も承っております。

## 郷土研究会にお入りになるには

- ◎会費は、年間2000円(4月～翌年3月、会報・諸案内状・諸会議費等)です。どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。
- ◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。または当会の各種行事の際にお申し込み下さい。

〒343-0041 越谷市 千間台西 2-17-16 宮川 進方  
 NPO法人・越谷市郷土研究会  
 ☎048-975-9139  
 事務所：旧日光街道沿いにある越谷産業会館の道路斜め反対側、  
 チャレンジショップ「夢空感(ゆめくらみ)」内にあります。  
 ☎048-962-2651

◎インターネットの「越谷市郷土研究会」には、越谷についての歴史の資料が満載されています。是非ご覧ください。

続くことになる。  
 野与党の一族渋江氏は、岩槻市(現、さいたま市岩槻区)渋江郷に居住した。この土地の名を称したのが、渋江氏の始まりである。鎌倉時代初期に渋江光術が地頭職を安堵されていることが「吾妻鏡」に見える。  
 室町時代以降、足利尊氏に仕え、戦国時代には、岩付城主太田氏に従っている。この頃には、渋江氏館は、岩付城に取り込まれてい  
 北条氏綱による岩付城攻撃の際には、太田氏配下の渋江氏が北条氏に内応した為に、大永五年(一五二五)二月に落城する。そして、渋江三郎が太田氏に代わって一時的に岩付城主となるが、五年後の享祿三年(一五三〇)に三郎は太田資頼に敗れて岩付城を奪還されてしまう。その後、太田氏とのさらなる戦いで、渋江三郎は戦死する。ここに渋江氏は滅びたという。  
 現在、岩槻市中心部に渋江町の名は無い。バス停にその名を残すのみである(写真2)。渋江館も早い時期に岩付城内に取り込まれ、昭和四十年代からの開発で岩槻市街も変貌した為に渋江館のあった場所も判然としなくなった。幸いにして、岩槻市内には、旧町名の石碑が建てられており(写真3)、渋江町のあった区域を把握することが出来る。  
 (写真2) 渋江バス停  
 現在、渋江氏ゆかりの渋江町の町名はないが、バス停にその名残を残している。

参考文献 「岩槻 城と町 まちの歴史」 越谷市教育委員会 聚海書林



「岩槻 城と町 まちの歴史」に刻まれた解説文。  
 岩槻城下九町の一つで、渋江口と田中町との間に位置する。中央を日光御成街道が貫き、街並みはその両側に広がる。この付近は、中世に渋江郷と呼ばれ、町名はここに由来する。  
 平成元年七月一日 岩槻市教育委員会

